

【齊紀九】 上章執徐，一年。

■南齊、●北魏 (国会図書館デジタルコレクション・続国訳漢文大成・經子史部 第 8 卷 8-256p)

東昏侯下永元二年（庚辰，500年）

■〔朝賀の帝の昼寢〕春，正月，元會に，帝は食後方に出る。朝賀は裁かに^{わづ}竟れば，即ち殿の西序（東西の廂を序）に還りて寢る。巳より申に至る。百僚は位に陪し，皆な^{きようふ}僵仆（こわばる）して饑甚しく。起きて會に就くに^{およ}比びて，^{そう}匆（慌ただし）遽して而して^や罷む。

●乙巳（5日），魏は大赦し，改元して景明とす。

【壽陽の裴叔業は魏に奔る】

■〔壽陽の裴叔業は去就に悩む〕豫州刺史の裴叔業は帝が數々大臣を誅するを聞き，心は自ら安んぜず。壽陽城に登り，北に肥水を望み，部下に謂って曰く、

「卿等は富貴ならんと欲する乎？我は能く之を辦ぜんや！」

南兗州に除せられる（前卷前年）に及び，意は内に従るを樂しまず。陳顯達の反する（前卷前年）に會す。叔業は司馬の遼東の李元護を遣わして兵を將いて建康を救わしめ，實に兩端を持つ。顯達は敗れ而して還る。朝廷は叔業の異志有るを疑い，（8-257p）叔業は亦た遣使して建康の消息を參察せしめ，衆論は益々之を疑う。叔業の兄の子の植、颺、粲は皆な直闇と為り，殿中に在り，懼れて，母を棄てて壽陽に奔り，叔業を説いて以て、

「朝廷は必ず相い掩襲する，宜しく早く計を為すべし」

と。徐世檨（続は才偏）等は^{おも}以うに、

「叔業は邊に在り，急なれば則ち魏を引いて自ら助け，力は未だ制する能わず」

と，帝に^{まお}白して叔業の宗人の中書舍人の長穆を遣わして旨を宣せしめ，本任に^{とど}停まるを許す。叔業は猶ほ憂い畏れ，而して植等は之を説いて已まず。

■〔裴叔業は魏に降るを決断〕叔業は親人（信任できる人）の馬文范を遣わして襄陽に至り，蕭衍に問いて自ら安ずるの之計を以てして，曰わしむ、

「天下の大勢は知る可し，復た自ら存するの之理無きを恐れる。面を回して北に向かわんには若かじ，河南公と^な作るを失わざらん。」

衍は報じて曰く、

「群小は事を用いる，豈に能く遠くに及ばんや！計慮は回り惑い，自ら成す所無く，唯だ應に家を送りて都に還し以て之を安慰すべし。若し意外に相い逼れば，當に馬步二萬を勒して直ちに横江（壽陽より南して歴陽に至り横江に出る）に出で，以て其の後ろを斷てば，則ち天下之事は，一舉に定まる可し。若し北に向かわんと欲せば，彼は必ず人を遣わして相い代わらしめ，河北の一州の相い處するを以て，河南公は^{なん}寧ぞ復た得る可き邪！此くの如くならば，則ち南歸之望は絶えん矣。」

叔業は沉疑（沈吟疑慮）して未だ決せず，乃ち其の子の芬之を遣わして建康に入りて質と為らしめ，亦た信（使者）を遣わして魏の豫州刺史（懸瓠に治す）の薛真度に詣らしめ，問うに魏に入るの可不之の宜を以てす。

真度は其の早く降るを勸めて，曰く、

「若し事は迫り而して來たれば，則ち功は微に賞は薄き矣。」

數々密信を遣わして、往來は相い應じて和す。建康の人は**叔業**の叛するを傳える者は已まず、**芬之**は懼れ、復た壽陽に奔る。**叔業**は遂に**芬之**及び兄の女婿の杜陵の**韋伯昕**を遣わして表を奉じて魏に降る。丁未（7日）、魏は驃騎大將軍の彭城王の**勰**、東騎將軍の**王肅**を遣わして歩騎十萬を帥いて之に赴かしむ。**叔業**を以て使持節、都督豫、雍等五州諸軍事、征南將軍、豫州刺史と為し、蘭陵郡公に封ず。

■ 【彭城王勰は壽陽駐屯、裴叔業討伐軍】 庚午（30日）、下詔して**叔業**を討つ。**二月**，丙戌（16日）、衛尉の**蕭懿**を以て豫州刺史と為す。●戊戌（28日）、魏は彭城王の**勰**を以て司徒と為し、揚州刺史を領し、壽陽（後漢以来の揚州治所、宋始めて豫州治所とし、今又旧に復す）に鎮せしむ。魏人は大將軍の**李丑**、**楊大眼**を遣わして二千騎を將して壽陽に入らしめ、又た**奚康生**を遣わして羽林の一千を將して馳せて之に赴かしむ。**大眼**は、**難當**（氏王の楊氏）之孫也。

● 【裴叔業は卒し裴植は魏の兗州刺史】 魏兵は未だ淮を渡らず、己亥（29日）、**裴叔業**は病して卒し、僚佐の多くは司馬の**李元護**を推して州を監さしめんと欲し、一二日は「はかりごと謀」は定まらず。前の建安（魏の正光中に羣蠻は山を出て邊城建安に居る者八九千戸。邊城郡は期思に治す。河南省汝陽道固始県あたり、現・信陽市固始県）**戊主**の**安定**の**席法友**等は**元護**は其の郷曲（同郷、裴叔業は河東の人、席法友は安定の人。後に襄陽に僑居し郷曲とす）に非らざるを以て、異志有るを恐れ、（8-258p）共に推して**裴植**に州を監せしめ、**叔業**の喪問（喪聞）を秘し、教命處分は、皆な**植**に於いて出る。**奚康生**は至り、**植**は乃ち開門して魏兵を納れ、城庫の**管籥**（かんやう鍵）は、悉く**康生**に付く。**康生**は城内の耆舊を集め、宣しく詔して之を賚（賜）いて撫でる。魏は**植**を以て兗州刺史と為し、**李元護**を齊州刺史と為し、**席法友**を豫州刺史と為し、軍主の京兆の**王世弼**を南徐州刺史と為す。

■ 【巴西の乱】 **巴西**（閬中県に治す、四川省嘉陵道閬中県の西、現・南充市閬中市）の民の**雍道晞**は衆萬餘を聚めて郡城に逼り、**巴西**太守の**魯休烈**は城に嬰（よ）りて自ら守る。**三月**，**劉季連**は中兵參軍の**李奉伯**を遣わして衆五千を帥いて之を救わしむ、郡兵と合い**道晞**を撃ち、之を斬る。**奉伯**は進みて郡東の餘賊を討たんと欲し、涪令の**李膺**は之を止めて曰く、

「卒はおこた愐り將はおご驕り、勝ちに乗りて險を履うは、完策（完勝の策）に非らざる也。少し緩め、更に後の計を思うに如かず。」

奉伯は従わず、衆を悉くして入山し、大敗して而して還る。

【崔慧景の叛乱】

■ 【崔慧景の出陣、壽陽奪還戦】 乙卯（15日）、平西將軍の**崔慧景**を遣わして水軍を將いて壽陽を討たしめ、**帝**は屏除（排除）し、琅邪城（白下）を出でて之を送る。**帝**は戎服して樓上に坐し、**慧景**を召して單騎にして圍内（屏除の長圍の内）に進ましめ、一人の自ら隨う者無し。わづ裁かに數言を交え、拜辭而して去る。**慧景**は既に出でるを得、甚だ喜ぶ。

■ 豫州刺史の**蕭懿**は歩軍三萬を將して小峴に屯し、交州刺史の**李叔獻**（武帝永明三年に交州より入朝し、交州刺史を帯びるもその險を頼みて庭せず。兵威で迫り遅れて至るも廃棄して用いず）は合肥に屯す。**懿**は裨將の**胡松**、**李導士**を遣わして衆萬餘を帥いて死虎（安徽省淮泗道壽縣の東四十餘里、現・淮南市寿縣）に屯す。驃騎司馬の**陳伯之**は水軍を將いて淮を溯って而して上がり、以て壽陽に逼り、硤石に軍す。壽陽の士民は齊に應ぜんと謀る者多し。

● 【魏の奚康生と宇文福】 魏の**奚康生**は内外を防禦（統、降御×）し、城を閉じて一月、援軍は乃ち至る。丙申（4月27日?混乱）、彭城王の**勰**、**王肅**は**松伯之**等を撃ち、大いに之を破り、合肥に進攻し、**叔獻**を生きて擒にす。統軍の**宇文福**は**勰**に於いて言つて曰く、

「建安は、淮南の重鎮にして、彼此（ひしどちらにも）の要衝にして、之を得れば、則ち義陽は圖り易（統は可）し。

得ざれば、則ち壽陽は保ち難し。」

懿は之を然りとし、福に建安を攻め使め、建安の戍主の**胡景略**は面縛して出で降る。

●己亥（4月30日?混乱）、魏の皇弟の**洸**は卒す。

■ **〔崔慧景の決意と帝の反撃命令〕** 崔慧景之建康を發する也、其の子の**覺**は直閣將軍たか為り、密かに之と（變を為すを）約し、**慧景**は廣陵に至り、**覺**は走りて之に従う。**慧景**は廣陵を過ぎること數十里、召して諸軍主に會つて曰く、

「吾は三帝（高帝・武帝・明帝）の厚恩を荷ない、顧托之重き（明帝の遺詔）に當たる。**幼主**は昏狂し、朝廷は壞亂す。危く而して扶けず、責は今日に在り。諸君と共に大功を建て以て社稷を安ぜんと欲す、何如か？」衆は皆な響き應じ、是に於いて軍を還して廣陵に向かう。（平西）司馬の**崔恭祖**は廣陵城を守り、**(8-259p)**開門して之を納れる。帝は變を聞き、壬子（13日混乱）、右衛將軍の**左興盛**に節を假し、建康の水陸諸軍を督して以て之を討たしむ。**慧景**は廣陵に停まること二日、即ち衆を収めて江を濟る。

■ **〔江夏王寶玄の去就、慧景は進軍〕** 初め、南徐、兗二州刺史の江夏王の**寶玄**は**徐孝嗣**の女を娶つて妃と為し、**孝嗣**の誅せられるや、詔して離婚せ使め、**寶玄**は恨望す。**慧景**は遣使して**寶玄**を奉じて主と為さんとし、**寶玄**は其の使いを斬り、因りて將吏を發して城を守らしめ、帝は馬軍主の**戚平**、外監の**黃林夫**を遣わして助けて京口に鎮ぜしむ。**慧景**は將に江を渡らんとし、**寶玄**は密かに與に相い應じ、司馬の**孔矜**、典籤の**呂承緒**及び**平林夫**を殺し、開門して**慧景**を納れ、長史の**沈佚之**、咨議の**柳澄**（心偏の字）をして分けて軍衆を部さしむ。**寶玄**は八〔才岡〕輿（八人で挙げる輿）に乗り、手ずから絳麾（紅色指揮旗。儀仗。齊書七王傳には絳麾幢に作る）を執り、**慧景**を隨えて建康に向かう。台は驍騎將軍の**張佛護**、直閣將軍の**徐元稱**等六將を遣わして竹裡（続は里）に據り、數城をつぐ為りて以て之を拒む。**寶玄**は信を遣わして**佛護**に謂つて曰く、「身は自ら朝に還る、君は何の意か苦ねんごろに相い斷遏すか？」

佛護は對えて曰く、

「小人は國の重恩を荷ない、此に於いて小戍を創立せ使む。**殿下**は朝に還れば、但だ自ら直ちに過ぎよ、豈に敢えて斷遏せんや！」

遂に**慧景**の軍を射て、因りて合戦す。**崔覺**、**崔恭祖**は前鋒を將い、皆な倉を荒らして善戦し、又た輕行して食を蒸さず、數舫を以て江に緣りて酒食（続、食×）を載せて軍糧と為し、台軍の城中に煙火が起こるを見る毎に、輒ち盡力して之を攻める。台軍は復た食を得ず、此を以て饑困す。**元稱**等は議して、降らんと欲し、**佛護**はき可かず。**恭祖**等は進みて城を攻め、之を抜き、**佛護**を斬る。**徐元稱**は降り、餘の四軍主は皆な死す。

■ **〔萬副兒の計略、台軍との激突〕** 乙卯（16日）、中領軍の**王瑩**を遣わして衆軍を都督し、湖頭に據りて壘を築かしむ、上に蔣山の西巖帶ぶること實甲數萬なり。**瑩**は、**誕**（司馬元顥や宋武帝の寵遇）之從曾孫也。**慧景**は查𣪠に至り、竹塘の人の**萬副兒**（射獵を善くし、よく虜を捕らえ、慧景に投じる）は**慧景**を説いて曰く、「今平路は皆な台軍の斷つ所と為り、進むを議す可からず。唯だ宜しく蔣山の龍尾（龍の尾っぽ状の地形）上より、其の不意に出るべき耳。」

慧景は之に従い、分けて千餘人を遣わし、魚貫（魚串刺、連列）して山に緣いて西巖より夜下り、鼓叫（鼓譟）して城中（湖頭に築く所の壘中）に臨む。台軍は驚き恐れ、即時に奔り散る。帝は又た右衛將軍の**左興盛**を遣わして台内の三萬人を帥いて北籬門に於いて**慧景**を拒ふせがしめ、**興盛**は風を望んで退き走る。

■ **〔崔慧景は太后令を稱宣〕** 甲子（25日）、**慧景**は樂游苑（玄武湖の南）に入り、**崔恭祖**は輕騎十餘を帥いて北掖門に突入し、乃ち復た出る。宮門は皆な閉まり、**慧景**は衆を引いて之を圍む。是に於いて東府、石

頭、白下、新亭の諸城は皆な潰ゆ。左興盛は走り、宮に入るを得ず、淮（秦淮河）の渚の荻舫中に逃げ、慧景は之を擒えて殺す。宮中は兵を遣わして出でて蕩（掃討）せしめ、克たず。慧景は蘭台（御史臺）の府署を焼きて戦場と為す。守衛尉の蕭暢は南掖門に屯し、(8-260p) 城内を處分し、方に隨いて應拒し、衆心は稍安んず。慧景は宣德太后（文惠太子の妃の王氏、鬱林の立つや皇太后と尊す。海陵王の廃せらるるや、出て宣德宮と号す）の令を稱し、帝を廢して吳王と為さんとす。

■ 〔巴陵王の昭胄兄弟の機転〕 陳顯達之反する也、帝は復た諸王侯を召して宮に入らしむ。巴陵王の昭胄は永泰之難（明帝永泰十年王敬則の乱で諸王召されて殺されそうになる、巻 141 にあり）に懲りて、弟の永新侯の昭穎と詐りて沙門と為り、江西（横江以西）に逃げる。昭胄は、子良（竟陵王、武帝の次子）之子也。慧景の舉兵に及び、昭胄の兄弟は出でて之に赴く。慧景の意（寶玄は明帝の子、昭胄は武帝の孫、武帝は高帝の太宗、故に慧景の意は向かう）は更に昭胄に向かい、猶豫して未だ立つ所を知らず。

■ 〔戦功争いで大混乱、崔覺は降る〕 竹裡之捷ちに、崔覺と崔恭祖は功を争い、慧景は決する能わず。恭祖は慧景に勧めて、

「火箭を以て北掖樓を焼くべし。」

慧景は以うに大事は定まるに垂々とし、後に若し更に造るには、費用功は多からんと、従わず。慧景は性は好みて義を談じ、兼ねて佛理を解し、法輪寺に頓まり、客（何點をいう）に對して高談し、恭祖は深く怨望を懷く。時に豫州刺史の蕭懿は兵を將いて（壽陽を討ちて）小峴に在り、帝は密使を遣わして之に告げる。懿は方に食し、箸を投げて而して起ち、軍主の胡松、李居士等數千人を帥いて採石より江を濟り、越城に頓して火を舉げ、城中（臺城中）は（援兵至ると）鼓叫して慶を稱す。恭祖は先ず慧景に勧めて、

「二千人を遣わして西岸の兵（蕭懿の兵が入り授けて江西より來たる兵）を斷ち、渡るを得ざら令めよ。」

慧景は以うに城は旦夕に降り、外救は自然に應に散るべしと、従わず。是に至り、恭祖は懿の軍を撃たんと請い、又た許さず。獨り崔覺を遣わして精手（精銳）數千人を將いて（秦淮の）南岸に渡らしむ。懿の軍は昧旦（薄く夜明け）進みて戦い、數合、士は皆な死に致り、覺は大敗し、淮に赴きて死する者二千餘人。覺は單馬にて退き、（朱雀）桁を開き淮を阻（防衛線）とする。恭祖は東宮の女伎を掠め得て、覺は逼りて之を奪う。恭祖は忿恨を積み、其の夜、慧景の驍將の劉靈運と與に城に詣りて降り、衆心は離壞す。

■ 〔崔慧景・崔覺・崔恭祖は皆誅殺される〕 夏，四月，癸酉（4日），慧景は腹心數人を將いて潜かに去り、北に江を渡らんと欲す。城北の諸軍は知らず、猶ほ為に拒戦す。城中は出でて蕩し、數百人を殺す。懿の軍は（秦淮河の）北岸（台城）に渡り、慧景の餘衆は皆な走る。慧景は城を圍むこと凡そ十二日に而して敗れ、從者は道に於いて稍く散じ、單騎にして蟹浦に至り、漁人の斬る所と為り、頭を以て鰕籃（続は鱖籃、鱖を入れる籠）に内し、建康に擔送す。恭祖は尚方に系（続は繫）がり、少時にして之を殺す。覺は亡命して道人と為り、捕獲されて、伏して誅す。

■ 〔帝は寶玄を一旦許す〕 寶玄は初め建康に至り、東城（東府城）に軍し、士民は多く往きて投集す。慧景の敗るるや、朝野は寶玄及び慧景に投じる人名を収得し、帝は之を焼か令めて、曰く、

「江夏すら尚ほ爾り、(8-261p) 豈に復た餘人を罪す可きや！」

寶玄は逃亡して數日、乃ち出ず。帝は召して後堂に入れ、步障（晋代に步障有り、貴族富家の出門の步障は住路の兩側を遮り、尤も其の内の脊は路人の看見せんと欲せず。竹を立て幕を張りて屏障となす）を以て之を褰み、左右の數十人をして鼓角を鳴らし其の外を馳繞せ令め、人を遣わして寶玄に謂って曰わしむ、

「汝は近ごろ我を圍み亦た此くの如きなる耳。」

■ 〔何點も許す〕 初め、慧景は處士の何點と交わらんと欲し、點は顧みず。建康を圍むに及び、逼りて點

を召す。點は其の軍に往き赴き、終日談義し（時間稼ぎをしてくれた功あり）、軍事に及ばず。慧景の敗るるや、帝は點を殺さんと欲す。蕭暢は茹法珍に謂って曰くね

「點が若し賊を誘い共に講せざれば、未だ量る可きこと易からざらん。此くを以て之を言え、乃ち應に封ずるを得るべし！」

帝は乃ち止む。點は、胤（何胤は會稽の若邪山に隱遁）之兄也。

■蕭懿は既に小峴を去り、王肅も亦た洛陽に還る。荒人の往來する者は妄りに雲う、
「肅は復た國に歸らんと謀る」

●五月，乙巳（6日），詔して肅（壽陽を取る功勞）を以て都督豫、徐、司三州諸軍事、豫州刺史、西豐公と為す。

■己酉（10日），江夏王の寶玄を伏して誅す。

■壬子（13日），大赦す。

●六月，丙子（8日），魏の彭城王の勰は位を大司馬に進め、司徒を領せしむ。王肅に開府儀同三司を加える。太陽蠻（続は大陽蠻とすべし）の田育丘等の二萬八千戸は魏に付き、魏は四郡十八縣を置く。

■乙丑（7月なら28日），建康、南徐、兗二州に曲赦（地域限定恩赦）す。是より崎（続は先），崔慧景は既に平らぎ、詔して其の黨を赦す。而るに嬖倖は事を用い、詔書に依らず、罪無くも而るに家富む者は、皆な誣りて賊黨と為し、殺し而して其の貲を籍す。實に賊に付き而して貧（続、盆×）する者は皆な問わず。或ひとは中書舍人の王暄之に謂って云う、
「赦書は信無く、人情は大いに惡む。」

暄之は曰く、

「正に當に復た赦有るべき耳。」

是に由りて再び赦す。既に而して嬖倖の誅縱するは亦た初めの如し。

【帝と側近の王望は益々激化】

■【帝の側近の内紛】是の時，帝の寵する所の左右は凡そ三十一人，黃門十人。直閣、驍騎將軍の徐世[心烈]は素より帝の委任する所と為り，凡そ殺戮する有れば，皆な其の手に在り。陳顯達の事の起こるに及び，輔國將軍を加える。護軍の崔慧景を用いて都督と為すと雖も，而して兵權は實に世[心烈]に在り。世[心烈]も亦た帝の昏縱を知り，密かに其の黨の茹法珍、梅蟲兒に謂って曰く、

「何の世の天子か要人無からん，但だ儂の貨主（荷主）は惡しき耳！」

法珍等は之と權を爭い，以て帝に白す。帝は稍く其の凶強なるを惡み，禁兵を遣わして之を殺さしめ，世[心烈]は拒み戦い而して死す。是より法珍、蟲兒は事を用じ，並（続は竝）んで外監と為り，口に詔敕を稱す。王暄之は文翰（公文書）を專掌し，相い與に脣齒（唇と齒、關係密切）す。

■【潘貴妃の父の寶慶の惡行】帝は幸する所の潘貴妃の父の寶慶及び茹法珍を呼びて阿丈（尊老）と為し，梅蟲兒及び俞（続は下に点四）靈韻を阿兄と為す。帝は法珍等と共に寶慶の家に詣り，身躬（続は自）ら水を汲み，厨（続、豆×）人を助けて膳を作る。（8-262p）寶慶は勢を恃んで奸を作し，富人を悉く誣うるに罪を以てし，田宅貲財は，啟乞（上に啓して求め乞う所）せざる莫し。一家は陥いれ被れ，禍いは親鄰に及ぶ。又た後患を慮りて，盡く其の男口を殺す。

■帝は數々諸々の刀敕（時人、捉刀、應勅）の家に往きて游宴し，吉凶有れば輒ち往きて慶弔（続、吊）する。

■【宦官の少年王寶孫の横暴】奄人（宦官）の王寶孫は，年十三四，號して「偃（狂）子」と為（続）し，最

も寵有り、朝政に参預し、王叡之、梅蟲兒之徒と雖も亦た之に下る。大臣を控制し、詔敕を移易し、乃ち馬に騎して殿に入り、天子を詆訶（呵責）するに至る。公卿は之を見、懾息（息を潜める）せざるは莫し焉。

● **「魏は吐谷渾王を許す」** 吐谷渾王の伏連籌は魏に事え禮を盡くし（藩臣の禮）、而れども其の國に居り、百官を置き、皆な天子之制の如く、制を其の鄰國に於いて稱す（君臨）。魏主は遣使して責めて而して之を宥す。

■● **「齊の壽陽攻撃と救援」** 冠軍將軍、驃騎司馬の陳伯之は（春以来）再び兵を引いて壽陽を攻め、魏の彭城王の勰は之を拒む。援軍は未だ至らず、汝陰太守の傅永は郡兵三千を將して壽陽を救う。伯之は淮口を防ぐこと甚だ固く、永は淮口（汝水の淮に入る所）を去ること二十餘里、船を牽いて汝水の南岸に上がり、水牛（黄牛より巨大）を以て之を挽き、直ちに南して淮に趣き、下船して即ち渡る。南岸に上がるに適い、齊兵は亦た至る。夜に會して、永は潜かに城に進（続は無し）入し、勰は喜ぶこと甚しく、曰く、

「吾は北望して已に久しく、洛陽の復た見る可きこと難しを恐れる、意わざるに卿は能く至る也。」

勰は永をして兵を引いて入城せ令め、永は曰く、

「永之此に來たるは、以て敵を卻けんと欲すなり。若し教旨（諸王と任を地方の州に専らにする者と、皆教えをその属に下すを得て、故に教旨という）の如きならば、乃ち是れは殿下と同じく攻（続、功×）圍を受けて、豈に救援之意なるや！」

遂に城外に軍す。

● **「勰と傅永は陳伯之を撃退」** 秋，八月，乙酉（18日）、勰は將士を部分し、永と勢いを並（続は并）せて伯之を肥口（淮水是壽春の北にあり、肥水是壽春の東をすぎて北に流れて淮に入る）に撃ち、大いに之を破り、斬首は九千、俘獲は一萬。伯之は身を脱して遁げ還り、淮南は遂に魏に入る。（淮南郡の治所は壽春）

● **「勰は洛陽に帰る」** 魏は鎮南將軍の元英を遣わして兵を將いて淮南を救わしめ、未だ至らざるに、伯之は已に敗れ、魏主は勰を召して洛陽に還らしむ。勰は累表して大司馬、領司徒を辭し、中山（元々定州刺史として赴任）に還るを乞う。魏主は許さず。元英を以て揚州の事を行わしめ、尋ぎて王肅を以て都督淮南諸軍事、揚州刺史と為し、持節を持して之に代わらしむ。

■ 甲辰（37日?）、夜、後宮に火す。時に帝は出でて（遊び走り回る）未だ還らず、宮内の人は出るを得ず、外の人は敢えて輒ち開かず。開くに及ぶ比、死者は相い枕し、三千餘間を焼く。

【潘妃の歩歩は蓮華】

■ **「潘妃の歩歩は蓮華を生ずる、惡政極まる」** 時に嬖倖之徒は皆な號して鬼と為す。（8-263p）趙鬼という者有り、能く《西京賦》（後漢の張衡は東京、西京の賦を作る）を讀み、帝に於いて言つて曰く、

「柏梁（漢武帝が長安に築いた高數十丈の樓台。梁に香柏、21卷漢武帝太初元年にあり）は既に災いし、建章是れ營む。」帝は乃ち大きく芳樂、玉壽等の諸殿を起し、麝香を以て壁に塗り、裝飾を刻畫し、綺麗を窮極す。役者は夜より曉に達り、猶ほ速かにするに副わず。後宮の服御は、極めて珍奇を選び、府庫の舊物は、復た用に周わず。民間の金寶を貴市（高価に買い入れる）し、價うに皆な數倍。建康の酒租は皆な折して金を輸せ使め（錢を以て納めるべきを金で納めさせる）、猶お能く足らず。金を鑿ちては蓮華を為りて以て地に貼り、潘妃に其の上を行か令め、曰く、

「此の歩歩は蓮華を生ずる也。」

又た雉の頭、鶴の髻（シヨウ鶴の毛衣）、白鷺の縷（鷺の羽毛）を訂ち出さしむ。嬖倖は因縁して奸利を為し、一

を課すに十を輸せしむ。又た各々州縣に就きて人の為に輸するを求め、見直を准取（現在の価値に相当する金銭を受け取る）し、為に輸送せず、守宰は皆敢えて言わず、重ねて更に斂を科す（割り当てて納付させる）。此の如く相い仍り、前後は息まず。百姓は困盡し、道路に號泣す。

● 〔齊の呉子陽等は三關を出て戦うも敗れる〕 軍主の呉子陽等は三關（黄峴関、武陽関、平靖関。河南省汝陽道信陽県南の黄峴関、現・信陽市周辺か）を出て魏を侵し、**九月**、魏の東豫州刺史の**田益宗**（太和十七年魏に降る、十九年東豫州を新息廣陵城に置き刺史とする）と長風城（河南省汝陽道潢川県、現・信陽市潢川県）に戦い、**子陽等**は敗れて還る。

■ 〔蕭懿は挙兵せず〕 蕭懿之入りて援ける也、蕭衍は馳せて親する所の**虞安福**をして懿を説いて曰わ使む、

「賊を誅する之後、則ち賞せられざる之功有り。明君賢主に当たりても、尚ほ或いは立ち難し。況んや朝の亂れるに於いておや、何を以て自ら免かれんや！若し賊滅ぶる之後、仍つて兵を勅して宮に入り、**伊、霍**（天子の廃嫡、鬼の霍乱）の故事を行えば、此れ萬世の一時なり。若し爾るを欲せざれば、便ち放表（上表）して歴陽に還り、托（続は託）するに外拒を事と為すを以てせば、則ち内外に威を振い、誰か敢て従わずや！一朝兵を放ち、其の厚爵を受ければ、高く而して民無く（官爵高くとも兵権を失い）、必ず後悔を生ぜん（手を束ねて死に就く）。」

長史の**徐曜甫**も亦た苦ろに之を勧めるも、懿は並（続は竝）んで従わず。

■ 〔蕭懿の誅殺と弟侄の潜伏〕 崔慧景は死するや、懿は尚書令と為る。弟は九人有り。**敷、衍、暢、融、宏、偉、秀、懌、恢**なり。懿は元勳を以て朝右に居り、暢は衛尉と為り管、籥を掌る。時に帝は出入すること度無く、或は懿に勧めるに、

「其の門を出るに因りて、舉兵して之を廢すべし」

懿は聽かず。嬖臣の**茹法珍、王暄之**等は懿の威權を憚り、帝を説いて曰く、

「懿は將に隆昌の故事（隆昌に鬱林王を廢せし事）を行わんとし、陛下の命は晷（日陰）刻に在り。」

帝は之を然りとする。**徐曜甫**は之を知り、密かに舟を江渚に具え、懿に、

「西して襄陽に奔るべし」

と勧める。懿は曰く、

「古より皆な死有り、**(8-264p)** 豈に叛きて走る尚書令の有らん邪！」

懿の弟侄（弟達?）は鹹（続は咸）な之の備えを為す。**冬、十月**、己卯（13）、帝は懿に省中に於いて藥を賜う。懿は且に死せんとして、曰く、

「家弟は雍に在り、深く朝廷の為に之を憂うる。」

懿の弟侄は皆な亡げて里巷に匿れ、人之を發く者無し。唯だ融は捕得せられて、之を誅す。

● 〔彭城王の綏の清潔な人柄〕 丁亥（21日）、魏は彭城王の綏を以て司徒、録尚書事と為す。綏は固辭し、免さず。綏は雅より恬素（恬淡素朴）を好み、勢利を樂しまず。**高祖**は其の事幹（事に臨みて幹用あり）を重しとし、故に權任を以て委ね、遺詔（前卷前年にあり）有りと雖も、復た**世宗**の留める所（外に方面により、内に司徒、録尚書事）と為る。綏は毎に情願に乖き、常に淒然として歎息す。人と為りは風儀美しく、端嚴なるに神の如く、折旋（曲行）は度に合い、出入には言笑し、觀る者は疲れを忘れる。尚ほ文史に敦く、物務之暇は、披覽して輟めず。小心謹慎にして、初めより過失無し。閒居獨處すると雖も、亦た惰容は無し。儒雅を愛敬し、心を傾けて禮待す。清く正しく儉素にして、門は私謁無し。

■ **十一月**、己亥（3日）、魏の東荊州刺史の**桓暉**は入寇し、下竿戍（沔北にあり、襄陽の北）を抜き、之に歸す

る者は二千餘戸。暉は、誕（宋明帝泰豫元年に桓誕は魏に降る）之子也。

【蕭衍の挙兵決意】

■ 【蕭衍、鄭植、鄭紹叔兄弟の悩み】 初め、帝は雍州刺史の蕭衍の異志有るを疑う。直後の滎陽の鄭植の弟の紹叔は衍の寧蠻長史為り、帝は植をして紹叔を候するを以て名と為し、往きて衍を刺さ（刺客）使む。紹叔は之を知り、密かに以て衍に白し、衍は紹叔の家に酒を置き、植に戯れて曰く、

「朝廷は卿を遣わして圖見る、今日の宴の間（はからは閑）に、是れ良き會を取る可き也。」

賓主は大いに笑う。又た植をして城隍、府庫、士馬、器械、舟艦を歴觀せ令め、植は退き、紹叔に謂って曰く、

「雍州の實力は、未だ圖り易からざる也。」

紹叔は曰く、

「兄は還り、具に天子の為に之を言え。若し雍州を取れば、紹叔は請う此の衆を以て一戦すべし！」

植を南峴（馬鞍山の道、江蘇省蘇常道崑山県、現・蘇州市崑山市）に送り、相い持ちて慟哭し而して別れる。

■ 【蕭衍と幕僚の出陣準備】 懿の死するに及び、衍は之を聞き、夜に張弘策、呂僧珍、長史の王茂、別駕の柳慶遠、功曹の吉士瞻等を召して（雍州の）宅に入らしめて議を定める。茂は、天生（齊の高帝に仕え袁榮を攻める 134 卷）之子、慶遠（雍州の豪望たち）は、元景之弟の子也。乙巳（9 日）、衍は僚佐を集めて謂って曰く、

「昏主は暴虐にして、惡は紂を逾（はは踰）える、當に卿等と共に之を除かん！」

是の日、牙を建てて衆を集め、甲士萬餘人、馬千餘匹、船三千艘を得る。檀溪の竹木を出して艦を装し、之を葺くに茅を以てし、事は皆な立ちどころに辦ず。諸將は櫓（はは櫓）を爭い、呂僧珍は先に具える所の者を出し、船毎に二張を付け、爭う者は乃ち息む。

■ 【蕭衍の劉山陽分断の陰謀】 是時、南康王の寶融は荊州刺史為り、(8-265p)西中郎の長史の蕭穎胄は府州の事を行い、帝は輔國將軍、巴西梓潼二郡の太守の劉山陽を遣わして兵三千を將いて官に之のかしめ、穎胄の兵に就きて襄陽を襲わ使む。衍は其の謀を知り、參軍の王天虎を遣わして江陵に詣り、遍く州府（州は荊州の官屬、府は西中郎府の官屬）に書を與えしめ、聲して云う、

「山陽は西上し、並（はは并）せて荊、雍を襲う。」

衍は因りて諸將佐に謂って曰く、

「荊州は素より襄陽の人（兵を習うので恐れる）を畏れ、加えるに脣亡びれば齒は寒きを以て、寧ぞ暗（なんは闇）同せざる邪！我は荊、雍之兵を合わせ、鼓行して而して東すれば、韓、白（韓信・白起）復た生ぜ使（なんは無し）むと雖も、能く建康の計を為さず。況んや昏主を以て刀敕之徒を役するを哉！」

穎胄等は書を得て、疑いて未だ能く決せず。山陽は巴陵（湖南省武陵道岳陽県、現・岳陽市岳陽県）に至り、衍は復た天虎をして書を繼（属は屬）ぎて穎胄と及び其の弟の南康王の友（王国の官に師あり、友あり、龍×）穎達（蕭穎達 477 年 - 510 年）に與え令む。天虎は既に行き、衍は張弘策に謂って曰く、

「用兵之道は、心を攻めるを上と為す。近ごろ天虎を遣わして荊州に往かしめ、人々は皆な書有り。今段（この度）に驛に乗ること甚だ急にして、止だ兩函有りて行事兄弟（穎胄・穎達）に與え、云う『天虎の口具（天虎が委細口で申し述べる）』と。天虎に問うに及びて而も口は説く所無し、天虎は是れ行事の心膂（穎胄の親人）なり、彼の間（荊州）は必ず行事と天虎共に其の事を隠すを謂わん、則ち人人は疑いを生ず。山陽は衆口に惑い、判（かなは）ず相い嫌貳（疑う）すべし、則ち行事の進退は以て自ら明（弁明）らかにする無く、必ず吾の謀（はかりごと）の内に入らん。是れ兩空函を馳（はは馳）せて一州を定めん矣。」

■ 【蕭穎達の深夜の作戦会議】 山陽は江安（晉の武帝太康元年江安県を立てる。南平郡。湖北省荊南道公安県、現・荊州市

公安県)に至り、遅回すること十餘日、上がらず。(江安より江州に至るには江に浜りて北上。齊書に巴陵に至り遅回すること十餘日進まず、とある) **穎胄**は大いに懼れ、^{はかりごと}計の出る所無く、夜遣(続は無し)りて西中郎城局參軍の安定の**席闡文**、咨議參軍の**柳忱**を呼び、齋を閉じて議を定める。**闡文**は曰く、

「**蕭雍州**は士馬を蓄養すること、復た一日に非らず。**江陵**は素より襄陽の人を畏れ、又た衆寡敵せず、之を取るとも必ず制する可からず。就え能く之を制するも、^{たと}歲寒(一年春夏秋冬の終わり、転じて終局の意)にして朝廷の容れる所と為さず。今若し**山陽**を殺し、雍州と與に事を挙げ、**天子**を立てて以て諸侯に令せば、則ち霸業は成る矣！**山陽**は疑いを持ちて進まざるは、是は我を信ぜざるなり。今斬りて**天虎**に送れば、則ち彼の疑いを釋く可し。至り而して之を圖れば、(8-266p) 濟らざる罔からん矣。」

忱は曰く、

「朝廷は^{きようぼつ}狂悖として日々に滋く、京師の貴人は足を重ねて息を^{おき}累めざる莫し。今幸いにも遠くに在り、日を假りて自ら安ずるを得る。雍州之事は、且に^か藉(借)りて以て相い斃さんとする耳。獨り**蕭令君**(尚書令の**蕭懿**)を見ず乎？精兵數千を以て、崔氏の十萬の衆を破り(続により補充)、竟に群邪の^お陷とす所と為り、禍酷は相い^つ尋げる。『前事之忘れざるは、後事之師也。(史記鄭世家の太史公の言)』且つ雍州は士銳にして糧は多く、**蕭使君**の雄姿は世に冠たり、必ず**山陽**の能く敵う所に非らず。若し**山陽**を破れば、荊州は復た律を失う之責めを受けて、進退は可なる無し、宜しく之を深慮すべし。」

蕭穎達は亦た**穎胄**に勧め**闡文**等の計に従わしむ。詰旦、**穎胄**は**天虎**に謂って曰く、

「卿は**劉輔國**と相い識り、今卿が頭を借りざるを得ず！」(王天虎の首で**劉山陽**を信用させる)

乃ち**天虎**を斬りて送りて**山陽**に示し、民の車牛を發し、聲して雲(続は云)う、

「歩軍を起こして襄陽を征す」

山陽は大いに喜ぶ。

■ 〔蕭穎達は劉山陽を斬り蕭衍に同調、竇融を立てる〕 甲寅(18日)、**山陽**は江津に至り、單車白服にて、左右數十人を従えて**穎胄**に詣る。**穎胄**は前の汝陽太守の**劉孝慶**等をして城内に兵を伏せ使め、**山陽**は門に入り(城門に入る)、即ち車中に於いて之を斬る。副軍主の**李元**(無×) **履**は餘衆を収めて降を請う。**柳忱**は、**世隆**(高武の佐命の功臣)之子也。**穎胄**は西中郎の司馬の**夏侯詳**が同ぜざるを慮り、以て**忱**に告げ、**忱**は曰く、

「易き耳！近ごろ**詳**は婚を求め、未だ之を許さざる也。」

乃ち女を以て**詳**の子の**夔**の嫁とし、而して之に謀を告げ、**詳**は之に従う。乙卯(19日)、南康王の**竇融**の教を以て纂嚴(行装を纂集)し、又た囚徒を教赦し(南康王の教書を以て赦す)、惠澤を施し、賞格を頒ける。丙辰(20日)、**蕭衍**を以て使持節都督前鋒諸軍事と為す。丁巳(21日)、**蕭穎胄**を以て都督行留諸軍事(行は東下の軍、留は留守軍)と為す。**穎胄**は器局(才能と度量。器量)有り、既に大事を舉げるや、心を虚(続、慮×)しくして己を委て、衆情は之に歸す。別駕の南陽の**宗夬**及び同郡の中兵參軍の**劉坦**、咨議參軍の**樂藹**が州人の信を推す所^た為るを以て、軍府の經略は、事毎に焉^{これ}を諮るなり。**穎胄**、**夬**は各々私錢穀を獻じ及び富貲を換借し以て軍を助ける。長法寺(江陵に在り。宋元嘉中に臨河王義慶は江陵に鎮し寺を起し、その本の生父長沙王道憊の為に福を資く)の僧は素より富み、黄金を鑄て金(続、無し)龍數千兩を^{つづ}為り土中に埋める。**穎胄**は之を取り、以て軍費に充(続は資)てる。

■ 〔出陣延期の論議〕 **穎胄**は遣使して**劉山陽**の首を**蕭衍**に送り、且つ言う、

「年月は未だ利せず、當に明年二月を^ま須ちて兵を進めるべし」

と。**衍**は曰く、

「事を擧げる之初めは、藉る所の者は一時の驍銳之心（一氣呵成）なり。事事は相い接し、猶ほ疑怠を恐れる。若し兵を頓して十旬すれば、必ず悔吝を生ぜん。且つ坐甲十萬をして、糧用は自ら竭きん。若し童子の異を立てれば、則ち大事は成らず。況んや處分已に定まり、安んぞ中息（中途に休む）す可き哉！昔**武王**は紂を伐ち、行きて太歳に逆う、豈に復た年月を待つ乎！」

■ 〔南康王の寶融の自立宣言へ〕 戊午（22日）、衍は上表して南康王の**寶融**に尊號を稱するを勧める。許さず。**十二月**、（8-267p）**穎胄**は**夏侯詳**と與に建康の百官及び州郡牧守に檄を移し、帝及び**梅蟲兒**、**茹法珍**の罪惡を數える。**穎胄**は冠軍將軍の天水の**楊公則**を遣わして湘州（張寶積を攻める）に向わしめ、西中郎參軍の南郡の**鄧元起**をして夏口（蕭衍を助けて張冲を攻める）に向わしむ。軍主の**王法度**は軍を進めざるに坐して官を免ぜらる。乙亥（10日）、荊州の將佐は復た**寶融**に尊號を稱するを勧める。許さず。**夏侯詳**之子の驍騎將軍の**但**（続は宣）は殿中主帥と為り、**詳**は密かに之を召し、**但**は建康より亡げ歸る。壬辰（27日）、江陵に至り、**宣**（続、無し）**德皇太后**之令を奉じると稱し、

「**南康王**は宜しく皇祚を纂承し、方に宮を清めるを俟ち、未だ大號に即かず。十郡（宣城・南琅邪・南東海・臨海・新安・尋陽・南郡・竟陵・宜都）に封じて宣城王、相國、荊州牧と為し、黃鉞を加え、百官を選ばしむ可く、西中郎府、南康國は故の如し。軍の近路に次ぐを須ち、主者は法駕を備えて奉迎すべし。」

■ 〔分離独立せず、上京するか否か〕 竟陵太守の新野の**曹景宗**は親人を遣わして**蕭衍**を説かしむ、

「**南康王**を迎えて襄陽に都し、先ず尊號を正し、然る後に軍を將（続は進）いよ」

衍は従わず。**王茂**はひそかに**張弘策**に謂って曰く、

「今は南康を以て人の手の中に置けば、彼は天子を扶（続は挾）けて以て諸侯に令さん、節下は前進して人の使う所と為り、此れ豈に它日之長計なる乎！」

弘策は以て**衍**に告げ、**衍**は曰く、

「若し前途の大事に捷たざれば、故より自ららんがい**蘭艾**（薰り高い蘭と荒れ地の雑草・玉石混淆）同焚す。若し其の克捷すれば、則ち威は四海に振るい、誰か敢えて従わざるや（続は無し）、豈に碌碌として人の處分を受ける者ならん邪！」

■ 〔諸侯の風見〕 初め、**陳顯達**、**崔慧景**之亂に、人心は安ぜず。或ひとは上庸太守の杜陵（漢以来京兆に属し、杜陵の令を僑立し、襄陽に寄治す）の**韋睿**（続は觀）に時事を問い、**睿**は曰く、

「**陳**は舊將と雖も、命世の才に非ず。**崔**は頗る事を更たれども、儒に而して武ならず。其の赤族（族滅する）すること宜しき矣。天下を定める者は、殆ど必ず吾が州將（州の刺史は方面に当たり兵權を統べる）に在るか乎？」乃ち二子を遣わして自ら**蕭衍**に結ぶ。**衍**の兵を起こすに及び、**睿**は郡兵二千を帥いて倍道して之に赴く。**華山**太守の**藍田**（漢の京兆に属す県、陝西省關中道内。宋は僑県を襄陽に置き、華山郡に属す）の**康絢**は郡兵三千を帥いて**衍**に赴く。**馮道根**（鄧県の人、胡三省注によると、漢代は沛郡に鄧県があり。廣平僑郡に属す）は時に母の喪に居し、**衍**の兵を起こすを聞き、郷人子弟の兵に勝る者を帥いて悉く往きて之に赴く。梁、南秦二州刺史の**柳惔**は亦た兵を起こして**衍**に應ず。**惔**は、**忱**之兄也。

■ 〔朝廷側の迎撃態勢〕 帝は**劉山陽**の死を聞き、詔を發して荊、雍を討つ。戊寅（13日）、冠軍長史の**劉澹**を以て雍州刺史（蕭衍に代えて）と為す。驍騎將軍の**薛元嗣**、制局監の**暨榮伯**を遣わして兵を及び運（続、過?）糧百四十餘船を將いて郢州刺史の**張冲**に送り、西師（荊雍の西軍）を拒ま使む。**元嗣**等は**劉山陽**之死に懲り、**冲**を疑い、敢えて進まず、夏口浦に停まる。西師の將に至らんとするを聞き、乃ち相い帥いて郢城に入る。前の竟陵太守の**房僧寄**は將に建康に還らんとし、郢に至り、帝は**僧寄**に敕して留まりて魯山（大別山、湖北省江漢道漢陽県の東北、現・武漢市蔡甸区）を守らしめ、（8-268p）驍騎將軍に除す。**張冲**は之と盟いを結

び、軍主の**孫樂祖**を遣わして數千人を將して**僧寄**を助けて魯山を守らしむ。

■ 鄧元起は江陵に至る **蕭穎胄**は武寧（晉安帝隆安五年に桓玄は沮漳の降蠻を以て武寧郡を立て、荊州に属す、湖北省荊南道松滋県、現・荊州市松滋市）太守の**鄧元起**に書を與えて、之を招く。**張冲**は**元起**を待つこと素より厚く、衆は皆な其の郢（州）に還るを勧め、**元起**は衆に大言して曰く、

「朝廷は暴虐にして、宰輔を誅戮し、群小は用事を用い、衣冠の道は盡きる。荊、雍二州は大事を同舉し、何ぞ克たざるを患えんや！且つ我の老母（時に鄧元起の母は江陵にあり、元起は南郡の人で武寧に守たり）は西に在り、若し事成らざれば、正に戮を昏朝に受けん、倖（続は幸）いに不孝之罪を免ず。」

即日嚴（裝備）を治めて道に上り、江陵に至り、西中郎の中兵參軍と為る。

■ 湘州行事の**張寶積**は兵を發して自ら守り、未だ附く所を知らず。**楊公則**は巴陵に克ち、白沙（成、黃陵廟の北。舜の二妃の廟。湖南省湘江道湘潭県、現・湘潭市湘潭県）に進軍し、**寶積**は懼れ、降を請い、**公則**は長沙に入り、撫でて之を納れる。

■● 楊集始は魏に降る 是の歲、北秦州刺史の**楊集始**は衆萬餘を將して漢中より北に出で、舊地を復せんと規^{はか}る。魏の梁州刺史の**楊椿**は步騎五千を將して出でて下辯に頓し、**集始**に書を遣わして、利害を以て開き、**集始**は遂に復た其の部曲千餘人を將して魏に降る。魏人は其の爵位を還し、歸りて武興を守ら使む。

令和 2 年 4 月 9 日	翻訳開始	7090 文字
令和 2 年 4 月 11 日	翻訳終了	12440 文字
令和 2 年 10 月 8 日	完訳終了	15039 文字
令和 3 年 11 月 5 日	書下し終了	15541 文字